

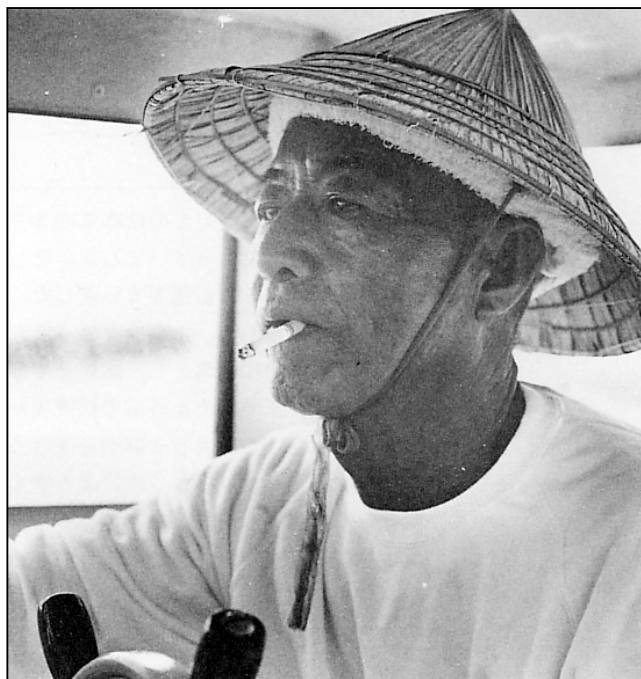
あげじゃびよ～

小池一彦

東京水産大学大学院生

研究者が勝手に分からない海域で調査なり研究なりを行う際に、その海で生活をしている人からの情報というものは非常に役に立つものです。阿嘉島臨海研究所の小艇(もと丸)の船長である“もとちのおじさん”こと金城英盛さんも、阿嘉島の海を知りつくし、我々研究者に的確なアドバイスを与えてくれる一人です。その特異なキャラクターは研究所の一つの魅力となっているのですが、おじさんに対する接し方いかんにより研究の成果にも影響が出てきますので、その“礼儀”をそつと教えましょう。まず、質問する生物の名前はなるべく沖縄方言を使うことです。コウイカならクブシミ、ブダイならイラブチャーといった具合に。ちなみにおじさんにかかると海藻はみんな“くさ”です。スキューバダイビングをしたり、他の島に行ったりする場合には、もと丸を使うことになるのですが、その際の注意事項は、船に泥のついた足で上がらないとか、荷物をバランス良く積むといった当然のことばかりですが、サンプリングがおわり海面から顔を出した途端にモリを渡され、「あそこにクブシミがいるからとってきなさい」と指令を受けることがあるかもしれません。コウイカ位なら笑えますが、これが海ガメやクジラになることもあるようです。

万が一、コウイカを本当に突いてきたとしたら阿嘉島の海はもうあなたのものです。海人(ウミンチュウ)として認めてもらえるかもしれませんが、他にも、ハワイに数ヶ月在住していた話とか、クジラにとどめをさした話とか、おじさんにまつわる逸話にはきりがありません。それは研究者の皆様が阿嘉島に行ったときの楽しみにとっておいた方がいいでしょう。またその時には表題の意味もお分りになることでしょう。



もとちのおじさん・金城英盛さん